

帚木

渋谷栄一訳

第一章 雨夜の品定め物語

「第一段 長雨の時節」

光る源氏と、名前だけは大層だが、非難されなざる取り沙汰が多いというのに、ますます、このような好色沙汰を、後世にも聞き伝わって、軽薄である浮き名を流すことになろうかと、隠していらつしやうた秘密事までを、語り伝えたという人のおしゃべりの意地の悪いことよ。とは言うものの、大変にひどく世間を気にし、まじめになさうていたところは、艶っぽくおもしろい話はなく、交野少将には笑われなうたことであるうよ。まだ近衛中将などでいらつしやうた時は、内裏にばかりよく伺候していらつしやうて、大殿邸には途切れがちに退出なざる。お浮気事かと、お疑い申すこともあつたが、そんなふうには浮気つばいありふれた思いつきの色恋事などは好きでないご性格で、時たまには、やむにやまれない予想を狂わせる気苦労の多い恋を、お心に思いつめなざる性癖が、はなはだ困つたこととて、よろしくないご素行もないではなかつた。

「第二段 宮中の宿直所、光る源氏と頭中将」

長雨の晴れ間のないころ、宮中の御物忌みが続いて、ますます長々と候なざるのを、大殿邸では気がかりで恨めしいとお思いになうていたが、すべてのご装束を何やかやと新しい様相に新調なうては、ご子息の公達が

ひたすらこのご宿直所の宮仕えをお勤めになる。

宮がお生みになつた中将は、中でも親しくお馴染み申されて、遊び事や戯れ事をも誰よりも気安く、親密に振る舞うていた。右大臣が気を配つてお世話なざる住居には、この君もとても何となく気が進まずにいて、浮気つぽい好色人なのである。

実家でも、自分の部屋の裝飾を眩しくして、源氏の君が出入りなざるのいつもお供申し上げなうては、昼も夜も、学問をも音楽をも一緒にして、少しもひげをとらず、どこにでも親しくご一緒申し上げなざるうちに、自然と遠慮もなくなり、胸の中に思うことをも隠しきれず、お親しみ申されるのであつた。

所在なく雨が一日中降り続いて、しつとりした宵の雨に、殿上の間でもろくに人少なで、ご宿直所もいつもよりはのんびりとした気がするので、大殿油を近くに寄せて漢籍など御覧になる。近くの御厨子にあるさまざまな色彩の紙に書かれた手紙類を取り出して、中将がひどく見たがるので、

「差支えのないのを、少しは見せよう。不体裁なものがあつてはいけなから」

と、お許しにならないので、

「その気を許して人に見られたら困るとお思いのこと興味があります。普通のありふれたのは、つまらないわたしでも、身分相應に、やりとりしては見ておきましょう。それぞれが、恨めしい折々、心待ち顔でいるような夕暮などのが、見所がありません」

と怨み言をいうので、貴重な絶対にお隠しになられるはずのものなどは、このようになおざりな御厨子などにちよつと置いて散らかされるはずはなく、奥深く別にしまつて置かれるはずのようだから、二流の気安いものがあるう。少しづつ見て行くと、「こんなにも、いろいろな手紙類がございまずなあ」と言つて、当て推量に「これはあの人か、あれはこの人か」などと尋ねる中で、言い当てるものもあり、外れているのをかつてに推量して疑ぐるのも、おかしいとお思いになるが、言葉少なに答えて何かと言ひ紛らわしては、取つてお隠しになつた。

「そなたこそ、たくさんお有りだらう。少し見たいね。そうしたら、この厨子も心よく開けよう」とおっしゃると、

「御覧になる値打のものは、ほとんどないでしょう」などと申し上げなさるついでに、

「女性で、これならば良しと難点を指摘しようのない人は、めったにいないものだなあと、だんだんと分かつてまいりました。ただ表面だけの風情で、手紙をさらさらと書き、時節に相応しい返答を心得て、ちよつとするぐらいのは、身分相応にまあまあ良いと思う者は多くいると拝見しますが、それも本当にその方面のことを取り出して試みると、必ず外れない者は、本当にめつたにないものですね。自分の得意なことばかりを、それぞれ得意になつて、他人を貶めたりなどして、見ていられないことが多いです。

親などが側で大切に育て、将来性のある箱入娘時代は、ちよつとの才能の一端を聞き伝えて、関心を寄せることもあるようです。容貌が魅力的でおつとりしていて、若々しくて家事に紛れることのないうちは、ちよつとした芸事をも、人まねに一生懸命に稽古することもあるので、自然と一芸をもつともらしくできることもあります。

世話をする人は、劣つた方面は隠して言わず、まあまあと言つた方面をとりつくりつて、それらしく言うので、それは、そうではあるまい」と、見ないでどうして推量し貶めることができましょう。本物かと付き合つて行くうちに、がっかりしないというのは、ないでしょう」

と言つて、嘆息している様子も気遅れするようなので、全部が全部というのではないが、ご自身でもなるほどとお思ひになることがあるのであるうか、ちよつと笑みを浮かべて、

「その、生かじりの才能もない人は、いようか」とおっしゃると、

「さあ、それほどのような所には、誰が騙されて寄りつきましようか。何の取柄もなくつまらない身分と、素晴らしいと思われるほどに優れた者とは同じくらいございませう。家柄が高く生まれれば、家人に大切に育てられて、人目に付かないことも多く、自然とその様子が格別でしょう。中の品にこそ、女の気質氣質、めいめいの考え方や趣向も見えて、区別されるものがそれぞれに多いでしょう。下の品という階層になると、格別関心もありませんね」

と言つて、何でも知つている様子であるのも、興味が惹かれて、その身分身分とは、どのようにか。どれを三つの階級に分け置くことがで

きるのか。元の階層が高い生まれでありながら、今の身の上は落ちぶれ、位が低くて人並みでない人。また一方で普通の人で上達部などまで出世して得意顔して邸の内を飾り、人に負けまいと思つている。その区別は、どのように付けたらよいのだろうか」

とお尋ねになつているところに、左馬頭や藤式部丞が御物忌に籠もろうとして参上した。当代の好色者で弁が達者なので、中将は待ち受けて、これらの品々の区別の議論を戦わす。まことに聞きにくい話が多かつた。

「第三段 左馬頭、藤式部丞ら女性談義に加わる」

「成り上がつても、元々の相応しいはずの家柄でないのは、世間の人の心証も、そうは言つても、やはり格別です。また、元は高貴な家筋であるが、世間を渡る手づるが少なく、時勢が変わつて、声望も地に落ちてしまうと、気位だけは高くても思うようにならず、不体裁なことなどが生じてくるものようですから、それぞれに分別して、中の品に置くのが適当でしょう。

受領と言つて、地方の政治に掛かり切りにあくせくして、階層の定まつた中にも、また段階階級があつて、中の品でかなりの者を、選り出すことができる時勢です。なまじつかの上達部よりも非参議の四位連中で、世間の信望もまんざらでなく、元々の生まれも卑しくない人が、あくせくせず

に暮らしているのが、いかにもさつぱりした感じですよ。
暮らしの中で足りないものなどは、やはりないのにまかせて、けちらずに眩しいほど大切に世話している娘などが、非難のしようがないほどに成長しているのもたくさんいるでしょう。宮仕えに出て来て、思いもかけない幸運を得た例などもたくさんあるものです」などと、

「およそ、金持ちによるといふことだね」と言つて、お笑いになるのを、他の人が言つように、意外なおつしやる」と言つて、中将は憎ら

がる。
「元々の階層と、時勢の信望が兼ね揃い、高貴な家で内々の振る舞いや様子が劣つていようなのは、言つてもないが、どうしてこつ育てたのだらうと、残念に思われましよう。兼ね揃つて優れているのも当たり前で、この女性こそは当然のことだと思われて、珍しいことだと気持ちも動かない

でしょう。わたくしごとき者の手の及ぶ範囲ではないので、上の品の上は措いておきましょう。

ところで、世間で人に知られず寂しく荒れたような草深い家に、思いも寄らないいじらしいような女性がひっそり閉じ籠もっているのは、この上なく珍しく思われましよう。どうしてまあ、こんな人がいたのだらうと、想像していたことと違つて、不思議に気持ち引けられるものです。

父親が年を取り、見苦しく太り過ぎ、兄弟の顔が憎々しげで、想像するにたいしたこともない家の奥に、とてもたいそう誇り高く、ちよつとした芸事でも、雅趣ありげに見えるようなのは、生かじりの才能であつても、どうして意外なことでもおもしろくないことがありましようか。

特別に欠点のない方面の女性選びは実現難しいでしょうが、そうでない者としては捨てたものではない」

と言つて、式部を見やると、自分の妹たちがまああの評判であることを思つておっしゃるのか、と受け取つたのであろうか、何とも言わない。

「さてどんなものか、上の品と思つ中でさえ難しい世の中なのに」と、源氏の君はお思ひのようである。白いお召物で柔らかな物の上に、直衣だけを気楽な感じにお召しになつて、紐なども結ばずに、寄り掛かつていらつしやる燈影は、とても素晴らしく、女性として拝したいくらいだ。この源氏の君のおんためには、上上の女性を選び出して、猶も満足でなさそうにお見えである。

さまざまな女性について議論し合つていって、
「通り一遍の仲として付き合つてゐるには欠点がなくとも、わが伴侶として信頼できる女性を選ぶほうとするには、たくさんいる中でも、なかなか決め難いものですね。男性が朝廷にお仕えし、しつかりした世の重鎮と言へるような者でも、眞の優れた政治家と言へるような人物を数え上げるとなると、難しいことではなうよ。しかし、賢者と言つても、一人二人で世の中の政治を執り行えるものではありませんから、上の人は下の者に助けられ、下の者は上の人に従つて、政治の事は広いものですから互いに委ね合つていくのでしよう。」

狭い家の中の主婦とすべき女性一人を思案すると、できないでは済まされないいくつもの大事が、こまこまと多くあります。ああ思えばこうであつ

たり、何かと食い違つて、人並にもまああやつて行けるような女性が少ないことによつて、浮気心の勢いのままに、世の女性の有様をたくさん見比べようとの好奇心ではないが、ひたすら伴侶としたいばかりに、同じことなら、自分で力入れて直したり教えたりしなければならぬような所がなく、気に入るような女性はいないものかと、選り好みしはじめた人は、決まらないものでしよう。

必ずしも自分の理想通りではないが、いつたん見初めた約束だけを破りがたく思い止まつている人は、誠実であると思え、そうして、一緒にいる女性のためにも、奥ゆかしいものがあるのだらうと自然と推量されるものです。しかし、どうしてか、世の中の夫婦の有様をたくさん拝見していくと、思いも及ばないたいして羨ましいと思われることもありませぬ。公達の最上流の奥方選びには、なおさらのこと、どれほどの方がご満足できましようか。

容貌がごきれいで、若々しいうちの、自分自身では塵もつけまいと身を振る舞い、手紙を書いて、おつとりと言葉選びをし、墨付きも淡く関心を持たせ持たせし、もう一度はつきりと見たいものだとじれつたく待たせ、わずかばかりの声を聞く程度に言い寄つても、息を殺して声小さく言葉少ななのが、とてもよく欠点を隠すものですね。艶っぽくて女性的だと見ると、度を越して情趣にこだわつて、調子を合わせると浮わつきます。これを、第一の難点と言つべきでしょう。

家事の中で、疎かにできない夫の世話、物の情趣が度を過ぎ、ちよつとした折の風情があり、趣味性に過度になるのはなくともよいことだろうと思われませんが、また一方で、家事一点張り、額髪を耳挟みがちに飾り気のない主婦で、ひたすら世帯じみた世話だけをして。

朝夕の出勤や帰宅につけても、公事や私事で他人の振る舞いや、善いこと悪いことで、目にも耳にも止まつた有様を、親しくもない他人にわざわざそつくり話して聞かせたりしましようか。親しい妻で理解してくれそうな者とこそ語り合いたいのだと思われ、つい微笑まれたり、涙ぐんだり、あるいはまた、無性に公憤をおぼえたり、胸の内に収めておけないことが多くあるのを、何で聞かせられようかと思ひますと、ついそつぽを向きたくなくて、人知れない思ひ出し笑いがこみ上げ、ああとも、つい独

り言を洩らすと、『何事ですか』などと、間抜けた顔で見上げるようなのは、どうして残念に思われぬでしょうか。

ひたすら子供っぽくて柔軟な女を、いろいろと教諭してはどうして妻としないでいられようか。心配なようでも、きつと直し甲斐のある気持ちがあるでしょう。なるほど、一緒に生活するぶんには、そんなふうでもかわいらしさに欠点も許され世話をしやれようが、離れていては必要な用事などを言いやり、時節に行なうような事柄の風流事にも実用事などにも自分では判断ができず深い思慮がないのは、まことに残念で頼りにならない欠点が、やはり困ったものでしょう。普段はちょっと無愛想で親しみの持てない女性が、何かの事に思わぬでき映えを發揮するようなこともありま

すからね」

「第四段 女性論、左馬頭の結論」

「今は、ただもう、家柄にもよりません。容貌はさらに問題ではありません。ひどく意に満たないひねくれた性格でさえなければ、ただひたすら実直で、落ち着いた心の様子がありそうな女性を、生涯の伴侶と考え置くのがよいです。それ以上の家柄のよさ気立てのよさが加わっていったなら、幸いと思いい、少し足りないところがあつても、無理に期待し要求するまい。安心できてるんびりとした性格さえはつきりしていれば、表面的な情趣は、自然と身に付けることができるものですからね。

思わせぶりにはいかんで見せて、怨み言をいうべきことをも見知らないふうにご我慢して、表面は何げなく平静を装いながら、胸に収めかね思ひあまつた時には、何とも言いようのないほどの恐ろしい言葉や、哀切な和歌を詠み残し、思ひ出になるにちがいない形見を残して、深い山里や、辺鄙な海浜などに姿を隠してしまふ者がいます。

子供でしたころ、女房などが物語を読んでいたのを聞いて、とても気の毒に悲しく、何と深く思いつめたことかと、涙までを落としました。今から思うと、とても軽薄で、わざとらしいことです。愛情の深い夫を残して、目の前に薄情なことがあるうとも、夫の気持ちを分らないかのように姿

をくらしめて、夫を慌てさせ、本心を見ようとすると、一生の後悔となるのは、大変につまらないことです。『深い考えだ』などと、褒め立てられて、気持ちが昂じてしまうと、そのまま尼になつてしまいます。思い立つた当座は、まことに気持ちも悟つたよつで、世俗の生活を振り返つてみようなど思わない。『まあ、何とおいたわしい。こうもご決心されたとは』などと云つたように、知り合いの人が見舞いに来たり、すっかり嫌だとも諦めてない夫が、聞きつけて涙を落とすと、召使いや、老女たちなどが、『殿のお気持ちは、愛情深かったのに。あたからお身を』などと云つ。自分でも額髪を触つて、手心もなく心細いので、泣顔になつてしまふ。堪えても涙がこぼれ出してしまうと、何かの時々には我慢もできず、後悔も多いようなので、仏もかえつて未練がましいと、御覧になるでしょう。濁世に染まつている間よりも、生悟りしたのは、かえつて悪道に墮ちさ迷うことになるに違いなく思われます。切つても切れない前世からの宿縁も浅くなく、尼にもさせず捜し出したような仲も、そのまま連れ添うことになつて、あのような時にもこのような時にも、知らないふうになっているような夫婦仲こそ、宿縁も深く愛情も厚いと言えましように、自分も相手も、気掛かりだと気をつかわないでしょうか。

また、いいかげんに愛情も冷めてきた夫を恨んで、態度に表わして離縁するようなのは、これまたばかげたことです。愛情が他の女に移ることがあつても、結婚した当初の愛情をいとしく思うならば、生涯の伴侶と思つていることもきつとあるでしょうに、そのようなごたごたから、夫婦の仲まで切れてしまふのです。

総じて、どのようなことでも心穏やかに、嫉妬することは知つている様子にほのめかし、恨み言をいう場合にもかわいらしくそれとなく言えば、それによつて、愛情も一段と増すことでしょう。一般に、自分の浮気心も妻の態度から収まりもするのです。あまりやたらに勝手にさせ放任しておくのも、気が楽でかわいらしいようだが、いつのまにか軽く見られるものです。繫がない舟の譬えもあり、まづたく思慮がない。そつではございませんか」と云つと、中将は頷く。

「今さし当たつて、美しいとか気立てがよいと思つて気に入つてゐるような人が、不安な疑いがあるのは重大でしょう。自分が乱心せず大目に見て

やっていたら、気持ちを変えて添い遂げないこともないだろうと思われ
が、そうとばかりも言えまい。いずれにしても、夫婦仲がうまくいかない
ような場合は、気長にじつと堪えているより以外に、良い手段はないよう
ですなあ」

と言つて、自分の妹の姫君は、この結論に当てはまつていらつしやる
と思うと、源氏の君が居眠りをして意見をさし挟みなさらないのを、物足り
なくおもしろくないと思う。左馬頭がこの評定の博士になって、さらに弁
じ立てていた。中将は、この弁論を最後まで聴こうと、熱心に相手にして
いらつしやつた。

「いろいろのことに引き比べてお考えください。木工の道の匠がいろいろの
物を思いのままに作り出すのも、その場限りの趣向の物で、そうした型と
きまりのないものは、見た目には洒落ているようだが、なるほどこうい
ふうにも作るのだと、時々に従つて趣向を変えて、目新しいのに目が移つ
て趣のあるものもあります。重大な物として、本当にれつきとした人の調
度類で装飾するのは、様式というようなものがあるものを立派に作り上げ
ることは、やはり本当の名人は、違つたものだと思分けられるものでござ
います。

また、絵所に名人が多くいますが、墨描きに選ばれて、順々に見るとま
たく優劣の判断は、ちよつと見ただけではつきません。けれども、人の見る
こともできない蓬萊山や、荒海の恐ろしい魚の形や、唐国の猛々しい獣の
形や、目に見えない鬼の顔などで、仰々しく描いた物は、想像のままに格
別に目を驚かして、実物には似ていないでしょうが、それはそれでよいで
しょう。

どこでも見かける山のたたずまいや、川の流れや、見なれた人家の有様
は、なるほどと見えて、親しみやすくおだやかな方面などを心落ち着いた
感じに配して、険しくない山の様子や、こんもりと俗塵を離れて幾重にも
重ねたり、近くの垣根の中には、それぞれの心配りや配置などを、名人は
大変に筆力も格別で、未熟な者は及ばない点が多いようです。

文字を書いたものでも、深い素養はなくて、あちこちに点長に走り書き
し、どことなく気取っているようなのは、ちよつと見ると才気がありひとか
どのように見えますが、正当の書法で丹念に習得しているものは、表面的

な筆法は隠れています。もう一度取り比べて見ると、やはり本物がいい
ものですね。

つまらない芸事でさえこうでございます。まして人の気持ち、折々に
様子ぶつていような見た目の愛情は、信用がおけないものと存じており
ます。その最初の例を、好色がましいお話ですが申し上げましよう」

と言つて、にじり寄るので、源氏の君も目をお覚ましになる。中将はひ
どく本気になって、頬杖をついて向かい合いに座つていらつしやつた。法師
が世の中の道理を説いて聞かせているような所の感じがするものも、もう一
方ではおもしろいが、このような折には、それぞれがうちとけたお話など
を隠しておくことができないのであつた。

第二章 女性体験談

「第一段 女性体験談（左馬頭、嫉妬深い女の物語）」

「若いころ、まだ下級役人でございました時、愛しいと思う女性がありまし
た。申し上げましたように、容貌などもたいして優れておりませんでした
ので、若いうちの浮気心から、この女性を生涯の伴侶とも思い決めませ
んで、通い所とは思いつながら、物足りなくて、何かとかがずらつておりまし
たところ、大変に嫉妬をいたしましたので、おもしろくなく、本当にこう
ではなくて、おつとりとしていたらと思つ一方、あまりにひどく厳しく疑
いましたのも煩わしくて、このようならつまらない男に愛想もつかさず、ど
うしてこう愛しているのだらうと、気の毒に思つ時々もございまして、自
然と浮気心も収められるといふふうでもございました。

この女の性格は、もともと自分にはできないことでも、何とかして夫の
ためにはと、無理算段をし、不得手な方面をも、やはりつまらない女だと見
られまいと努力しては、何かにつけて、熱心に世話をし、少しでも意に沿
わないことのないようにと思つていたうちに、気の勝つた女だと思いまし
たが、何かと言つことをきくようになつて柔らかくなってゆき、美しくな
い容貌についても、このわたしに嫌われやしまいかと、無理に化粧し、親

しくない人に会つたならば、夫の面目が潰れやしまいかと、遠慮し恥じて、身嗜みに気をつけて生活しているうちに、性格も悪いといふのはありませんでしたが、ただこの憎らしい性質一つだけは、収まりませんでした。

その当時に思いましたことには、このようにひたむきにわたしに従いおどおどしている女のようだ、何とか懲りるほどの思いをさせて、脅かして、この方面も少しはまあまあになり、手に負えないことも止めさせようと思つて、まことに辛いように思つて別れてしまいそうな様子ならば、それほどわたしに連れ添う気持ちがあるならば懲りるだろうと存じまして、わざと薄情に冷淡を装つて、いつものように怒つて恨み言をいう折に、

『こんなに我が強いなら、どんなに夫婦の宿縁が深くとも、もう二度と逢うまい。最後と思つたならば、このようなめっちゃくちな邪推をするがよい。将来も長く連れ添おうと思つたならば、辛いことがあつても、我慢してたいしたことのないように適当に思つて。このような嫉妬心さえ消えたならば、愛しい女と思おう。人並みに出世もし、もう少し一人前になったら、他に並ぶ人がない正妻になるであらう』

などと、うまく教えたものよと存じまして、調子に乗つて度を過ぎして言いますと、少し微笑んで、

『万事に見栄えがしなく、一人前でないうちは我慢して、いつか一人前になるうかと待つてゐる間は、まことに久しく思われても、嫌とは思いません。辛いお心を我慢して、心を入れ換えるのを見い出そうと、年月を重ねるよくな当てにならない期待は、まことに辛くもありましょうから、お互いに別れるによい時期です』

と憎らしげに言うので、腹立たしくなつて、憎々しげな言葉を興奮して言いますと、女も黙つていられない性格で、指一本を引張つて噛みつきましたので、大げさに文句つけて、

『このような傷まで付いてしまったので、いよいよ役人生活もできるものではない。軽蔑なさるような官職で、ますますこのようにして出世して行けようか。出家しかない身のようだ』などと言い脅して、それでは、今日という今日がお別れのようだ』と、この指を折り曲げて退出しました。

『あなたとの結婚生活を折り折り数えてみますと、この一つだけがあなたの嫌な点なものか、恨むことはできませんまい』

などと言いまして、そうは言つものの涙ぐんで、

『あなたの辛い仕打ちを胸の内に堪えてきましたが、今は別れる時なのでしようか』

などと、言い争いましたが、本当は別れようとは存じませんままに、何日も過ぎるまで便りもやらず、浮かれ歩いていたところ、臨時の祭の調楽で、夜が更けてひどく曇が降る夜、めいめい退出して分かれる所で、思いめぐらすと、やはり自分の家と思える家は他にはなかつたのでしたなあ。

内裏あたりでの宿直は気乗りがしないし、気取つた女の家は何となく寒くないだろうか、と存じられましたので、どう思つてゐるだろうか、様子見がてら、雪をうち払いながら、何となく体裁が悪くきまりも悪く思われるが、いくらなんでも今夜はこのところの恨みも解けるだろう、と存じましたが、灯火を薄暗く壁の方に向け、柔らかな衣服の厚いのを、大きな伏籠にうち掛けて、引き上げておくはずの几帳の帷子などを引き上げてあつて、今夜あたりはと、待つていた様子です。やはりそうであつたよと得意になりましたが、本人はいません。しかるべき女房連中だけが残つていて、『親御様の家に、今晚は行きました』と答えます。

気持ちをそそるような和歌も詠まず、思わせぶりな手紙も書き残さず、もつぱらそつけなく無愛想であつたので、拍子抜けした気がして、口やかましく許さなかつたのも、自分を嫌になつてくれ、と思つた気があつたからだろうかと、そのようには存じられなかつたのですが、おもしろくないままそう思つたのですが、着るべき物が、いつもより念を入れた色合いや、立て方がとても素晴らしくて、やはり離別した後までも、気を配つて世話してくれていたのでした。

そうは言つても、すっかり愛想をつかさうなことはあるまいと存じまして、いろいろと試みてみましたが、別れるでもなくと、探し出させようという行方を悔ますのでもなく、きまり悪くないように返事をしいし、ただ、以前のような心の上までは、とても我慢できません。改心して落ち着くならば、また一緒に暮らしましょう』などと言いましたが、そうは言つても思ひ切れまいと存じたので、少し懲らしめようという気持ちから、『そのように改めよう』とも言わず、ひどく強情を張つて見せていたところ、とてもひどく思い嘆いて、亡くなつてしまいましたので、冗談も言えないよ

うに存じられました。

一途に生涯頼みとするような女性としては、あの程度で確かに良いと思
い出さずにはいられません。ちょっとした風流事でも実生活上の大事でも
相談してもしがいがなくはなく、龍田姫と云つても不似合いでなく、織姫の
腕前にも劣らないその方面の技術をもつていて、行き届いていたのでした」
と云つて、とてもしみじみと思ひ出していた。中将が、

「その織姫の技量はひとまずおいても、永い夫婦の契りだけにはあやかりた
いものだったね。なるほど、その龍田姫の錦の染色の腕前には、誰も及ぶ
者はいないだろうね。ちょっとした花や紅葉といつても、季節の色合いが相
応しくなく、はつきりしていないのは、何の見映えもなく、台なしになつ
てしまうものだ。そうだからこそ、難しいものだ」と決定しかねるのですな
と、話はずまされる。

「第二段 左馬頭の体験談（浮気な女の物語）」

「ところで、また同じところに、通つていました女は、人品も優れ気の働かせ
方もまことに嗜みがあると思われのように、素早く歌を詠み、すらすらと
書き、掻いつま弾く琴の音、その手つき口つきが、みな確かであると、見
聞きしておりました。見た目にも無難でしたので、先程の嫉妬深い女を氣
の置けない通い所にして、時々隠れて逢つていました間は、格段に氣に入つ
ておりました。今の女が亡くなつて後は、どうしましよう、かわいそうだと
は思いながらも死んでしまったものは仕方がないので、頻繁に通うようにな
つてみますと、少し派手で婀娜っぽく風流めかしていることは、氣に入
らないところがあつたので、頼りにできる女とは思わずに、途絶えがちに
ばかり通つていましたら、こつそり心を通じている男がいたらしいのです。
神無月の時節ごろ、月の美しかった夜に、内裏から退出いたしますに、あ
る殿上人が来合せて、わたしの車に同乗してましたので、大納言殿の家
へ行つて泊まろうとすると、この人が言つことには、今宵は、わたしを待つ
ているだろう女が、妙に氣にかかるよ」と云つて、先程の女の家は、ちよ
うど通り道に当たつていたので、荒れた築地塀の崩れから池の水に月の光が
映つていて、月でさえ泊まるこの宿をこのまま通り過ぎてしまふのも惜し

いというので、降りるのでございました。

以前から心を交わしていたのでしようか、この男はとてもそわそわして、
門近くの渡廊の簀子のような所に腰を掛けて、暫く月を見えています。菊は
一面にとても色美しく変色しており、風に勢いづいた紅葉が散り乱れてい
るのなど、美しいものだなあと、なるほど思われました。

懐にあつた横笛を取り出して吹き鳴らし、月影も良い」などと合い間合
い間に謡うと、良い音のする和琴を、調子が調べてあつたもので、きちん
と合奏していたところは、悪くはありませんでした。律の調子は、女性が
もの柔らかく掻き鳴らして、簾の内側から聞こえて来るのも、今はやりの
楽の音なので、清く澄んでいる月に似合わないでもない。その男はひどく
感心して、御簾の側に歩み寄つて、

「庭の紅葉を、踏み分けた跡がないですね」などと嫌がらせを言います。菊
を手折つて、

「琴の音色も月も素晴らしいお宅ですが、薄情な方を引き止めることができ
なかつたようですね。悪いことを言つたかしら」などと云つて、もう一曲、
喜んで聞きたいという人がいる時、弾き惜しみなさいますな」などと、ひ
どく色っぽく言いかけますと、女は、声をとても氣取つて出して、

「冷たい木枯らしに合うようなあなたの笛の音を、引きとどめる術をわたし
は持ち合わせていません」

と色っぽく振る舞い合います。憎らしくなつてきたのも知らずに、今度
は、箏の琴を盤渉調に調べて、今はやりに掻き鳴らす爪音は、才能が無い
ではないが、目を覆いたい氣持が致しました。ただ時々言葉を交わす
宮仕え人などで、どこまでも色っぽく風流なのは、そうであつても付き合
うには興味もありましよう。時々であつても、通い妻として生涯の伴侶と
致しますには、頼りなく派手すぎると嫌気がさして、その夜のことに口実
をつくつて、通うのをやめてしまいました。

この二つの例を考え合はすに、若い時の考えでさえも、やはりそのように
派手な女の例は、とても不安で頼りなく思われました。今から以後は、いつ
そうそのようにはばかり思われることでしょうか。お心のままに、手折るとこ
ぼれ落ちてしまふような萩の露や、拾つたと思つと消えてしまふ玉笹の上
の霰などのような、しゃれていてか弱く風流なのばかりが、興味深くお思

いでしようが、今はそうであつても、七年のうちにお分りになるでしょう。わたくしめごとき、卑賤の者の忠告ですが、色っぽくなよよとした女性にはお気をつけなさいませ。間違いを起こして、相手の男の愚かな評判までも立ててしまつたのです」

と、忠告する。中将は例によつてつなずく。源氏の君は少し微笑んで、そういうものだろうとお思ひのようである。

「どちらの話にしても、体裁の悪くみつともない体験談だね」と言つて、皆でどつと笑い興じられる。

「第三段 頭中将の体験談（常夏の女の物語）」

中将は、

「わたしは、馬鹿な体験談をお話ししよう」と言つて、ごくこつそりと通い始めた女で、そうした關係を長く続けてもよさそうな様子だったので、長続きのすることは存じられませんでした。馴れ親しんで行くにつれて、愛しいと思われましたので、途絶えがちながらも忘れられない女と存じておりましたが、それほど仲になると、頼りにしている様子にも見えませんでした。頼りにするとなると、恨めしく思つていゝこともあるだろうと、我ながら思われる折々もありましたが、見知らぬふうをして、久しく通つて行かないのを、こういうたまにしか来ない男とも思つていないで、ただ朝夕にいつも心に掛けていゝという態度に見えて、いじらしく思えたので、ずつと頼りにしているように言つたこともあつたのでした。

親もなく、とても心細い様子で、それならわたしこそをと、何かにつけて頼りにしている様子もいじらしげでした。このようにおつとりしていることに安心して、長い間通つて行かないでいたころ、わたしの妻の辺りから、思慮のない辛いことを、ある手づるがあつてそれとなく言わたことを、後になつて聞いたのでした。

そのような辛いことがあつたとも知らず、心中では忘れていないとはいふものの、便りなども出さずに長い間おりましたところ、すっかり悲觀して不安だつたので、幼い子供もいたので思ひ悩んで、撫子の花を折つて、送つて寄こしました」と言つて涙ぐんでいる。

「それで、その手紙には」とお尋ねになると、

「いや、格別なことはありませんでしたよ」

「たとえ山家の垣根は荒れていても、時々はかわいがつてやってください撫子の花を」

思い出したままに行きましたところ、いつものように無心なようでないがら、ひどく物思い顔で、荒れた家の露のしつとり濡れているのを眺めて、虫の鳴く音と競つかのように泣いていゝ様子は、昔物語めいて感じられました。

「庭に咲く花はいずれも皆美しいが、やはり常夏の花が一番美しく思われ
ます」

大和撫子のことはさておいて、まず、せめて塵だけは払おうなどと、親の機嫌を取ります。

露に濡れている常夏に、さらに激しい風の吹きつける秋までが来ました。とさりげなく言いつくろつて、本気で恨んでいるようにも見えませんが、涙をもらし落としても、とても恥ずかしく気兼ねして取り繕ひ隠して、薄情を恨めしく思つていゝことを知られるのが、とてもたまらないらしいことのように思つていたので、氣樂に構えて、再び通わずにいましたうちに、跡形なく姿を晦ましていなくなつてしまいました。

まだ生きていれば、みじめな生活をしていゝことでしょう。愛しいと思つていゝしたころに、うるさいくらいにまとわり付くような様子に見えたならば、こういうふうには行方不明にはさせなかつたものを。こんなにも途絶えはせずに、通ひ妻の一人として末永く關係を保つこともあつたでしょうに。あの撫子がかわいらしうございまして、何とか捜し出したいものだと思つておりますが、今でも行方が知れません。

これがおつしやられた頼りない女の例でしょう。平氣をよそおつて辛いと思つていゝのも知らなくて、愛し続けていたのも、無益な片思いでした。今はだんだん忘れかけて行くところになつて、あの女は女で忘れられず、時折自分のせいで胸を焦がすタムもあるであろうと思われまふ。この女は、永続きしそつたにない頼りない例でしたなあ。

それだから、あの嫉妬深い女も、思い出される女としては忘れ難いけれども、実際に結婚生活を続けて行くのにはうるさいね、悪くすると、嫌

になることもありましようよ。琴が素晴らしい才能だったという女も、浮気な欠点は重大でしょう。この頼りない女も、疑いが出て来ましようからどちらが良いとも結局は決定しがたいのだ。男女の仲は、ただこのようなものだ。それぞれに優劣をつけるのは難しいでしょう。このそれぞれの良いところばかりを身に備えて、非難される点を持たない女は、どこにいまましようか。吉祥天女に思いをかけようとすれば、抹香臭くなり、人間離れしているのも、また、おもしろくないでしょう」と言って、皆笑った。

「第四段 式部丞の体験談（畏れ多い女の物語）」

「式部のところには、変わった話がある。少しずつ、話して聞かせよ」と催促される。

「下の下のわたくしめ」とき者には、何の、お聞きあそばす話がありましよう」と言つが、頭の君が、真面目に「早く早く」とご催促されるので、何を話し申そうかと思索したが、

「まだ文章生でございました時、畏れ多い女性の例を拝見しました。先程、左馬頭が申されましたように、公事をも相談し、私生活の面での心がけも考え廻らすこと深く、漢学の才能はなまじつかの博士が恥ずかしくなる程で、万事口出すことは何もございませんでした。

それは、ある博士のもとで学問などを致そうと思つて、通つておりましたころに、主人の娘が多くいるとお聞き致しまして、ちよつとした折に言い寄りましたところ、父親が聞きつけて、盃を持って出て来て、『わたくしが両つ途を歌うのを聴け』と謡いかけてきました。少しも結婚してもよいと思つて通つていませんでしたので、あの父親の気持ちに気兼ねして、そうは言つもののかかずらつていましたところ、とても情け深く世話をし、閨房の語らいにも、身に学問がつき、朝廷に仕えるのに役立つ学問的なことを教えて、とても見事に手紙文にも仮名文字というものを書き交ぜず、本格的に漢文で表現しますので、ついつい別れることができず、その女を先生として、下手な漢詩文を作ることなどを習いましたので、今でもその恩は忘れませんが、慕わしい妻として頼りにするには、無学のわたしは、どこなく劣つた振る舞いなど見られましようから、恥ずかしく思われまし

た。ましてあなた様方の御ためには、しっかりと手ぬかりのない奥方様は、何の必要がありあそばしましようか。つまらない、残念だ、と一方では思いながらも、ただ自分の気に入り、宿縁もあるようなので、男という者は、他愛のないものようでございます。」

と申し上げるので、続きを言わせよう」と、それにしてもまあ、何と興味ある女だろつか」と、おだてなざるのを、そうとは知りながらも、鼻のあたりをおかしなかつこうさせて語り続ける。

「そうして、ずいぶん長く行きませんでしたころ、何かのついでに立ち寄りましたところ、いつものくつろいだ所にはおりませんで、不愉快な物を隔てて逢います。嫉妬しているのかと、ばかばかしくもあり、また、別れるにちよつど良い機会と存じましたが、この畏れ多い女という者は、軽々しい嫉妬をするはずもなく、男女の仲を心得て恨み言を言いませんでした。声もせかせかと言つことには、

「数月来、風邪が重いのには堪え兼ねて、極熱の薬草を服して、大変に臭いので、面会は御遠慮申し上げます。直接にでなくても、しかるべき雑用などは承りましよう。」

と、いかにも殊勝にもつともらしく言います。返事には何と言えようか。ただ『承知しました』とだけ言つて、立ち去ります時に、物足りなく思つたのでしよつか。この臭いが消えた時にお立ち寄り下さい』と声高に言うのを、聞き捨てるのも気の毒ですが、しばしの間でもためらつて居る場合でもありませんので、ほんとに、その臭いまで、ぶんぶんと漂つて来るのも堪りませんので、逃げ時をうかがつて、

「蜘蛛の動きでわたしの来ることがわかつて居るはずの夕暮に、昏間が過ぎるまでまで待てと言つのがわかりません。どのような口実ですか。」

と、言い終わらず逃げ出しましたところ、追いかけて、

「逢うことが一夜も置かずに逢つて居る夫婦仲ならば、昏間逢つたからとてどうして恥ずかしいことがありましようか。」

「さすがに返歌は素早うございました。」

と、落ち着いて申し上げるので、公達は興醒めに思つて、「嘘だ」と言つてお笑いになる。

「どこにそのような女がいようか。のんびりと鬼と向かい合つていたほうが

「ました。気持ちが悪い話よ」

と爪弾きして、「何とも評しようがない」と、式部を軽蔑し非難して、
「もう少しましな話を申せ」とお責めになるが、

「これ以上珍しい話がございませうか」と言つて、澄ましている。

「すべて男も女も未熟者は、少し知つてゐる方面のことをすっかり見せようと思つてゐるのが、困つたものです。」

三史五経といった学問的な方面を、本格的に理解するといふのは、好感の持てないことですが、どうして女だからといつて、世の中の公私の事々につけて、まったく知りませんでせよと言つていられますか。本格的に勉強しなくても、少しでも才能のあるような人は、耳から目から入つて来るのが、自然に多いはずですよ。

そのようなことから、漢字を走り書きし、お互いに書かないはずの女どうしの手紙文に、半分以上書き交せてゐるのは、ああ何と厭味な、この人が女らしくあつたらなあと思われます。気持ちの上ではそんなにも思わないでしょうが、自然とごつごつした声に読まれ読まれて、わざとらしく感じられます。上流の中にも多く見られることです。

和歌を詠むことを鼻にかけてゐる人が、そのまま和歌のとりことなつて、趣のある古歌を初句から取り込み取り込みして、相応しからぬ折々に、それを詠みかけて来ますのは、不愉快なことですよ。返歌しないと人情がないし、出来ない人は体裁が悪いですよ。

しかるべき節会などで、五月の節会に急いで参内する朝に、落ち着いて分別などしていられない時に、素晴らしい根にかこつけてきたり、重陽の節会の宴会のために、何はともあれ難しい漢詩の趣向を思いめぐらして、暇のない折に、菊の露にかこつけたような、相応しからぬことに付き合はせ、そういう場合ではなくとも自然と、なるほど後から考えればおもしろくもしみじみともあるはずのものが、その場合には相応しくなく、目にも止まらないのを、察しませずに詠んで寄こすのは、かえつて気がきかないように思われます。

万事につけて、どうしてそうするのか、そうしなくとも、と思われる折々に、時々、分別できない心では、気取つたり風流めかしたりしないほうが難でしょう。

総じて、心の中では知つてゐることも、知らない顔をして、言いたいことも、一つ二つは言わないでおくのが良いといふものでしょう。」

と言つにつけても、源氏の君は、お一方の御様子、胸の中に思い続けたいらうしやる。」この結論に足りないことまた出過ぎたところもない方ではないらうしやるなあ」と、比類ないことにつけても、ますます胸がいつぱいになる。

どういふ結論に達するといふでもなく、最後は聞き苦しい話に落ちて、夜をお明かしになつた。

第三章 空蟬の物語

「第一段 天気晴れる」

やつと今日は天気も好くなつた。こうしてばかり籠つていらつしやるのも、左大臣殿のお気持ちが気の毒なので、退出なさつた。

邸内の有様や、姫君の様子も、端麗で気高く、くずれたところがなく、やはり、この女君こそは、あの、人々が捨て置き難く取り上げた実直な妻として信頼できるだらう、とお思ひになる一方では、度を過ぎて端麗なご様子で、打ち解けにくく氣づまりな感じにとり澄ましていらつしやるのが物足りなくて、中納言の君や中務などといった、人並み優れてゐる若い女房たちに、冗談などをおっしゃりおっしゃりして、暑さにお召し物もくつろげていらつしやるお姿を、素晴らしく美しい、と思ひ申し上げている。

左大臣もお渡りになつて、くつろいでいらつしやるので、御几帳を間に立ててお座りになつて、お話を申し上げなされるのを、「暑いのに」と苦い顔をなさるので、女房たちは笑つ、「お静かに」と制して、脇息に寄り掛かつていらつしやる。いかにも大君らしい鷹揚なお振る舞いであるよ。

暗くなるころに、

「今宵は、天一神が、内裏からこちらの方角へは方塞がりになつております」と申し上げる。

「そつですわ。普通は、お避けになる方角でありますよ」

「一茶院も同じ方角であるし、どこに方違えをしようか。とても気分が悪いのに」

と言つて寢所で横になつていらつしやる。「大変に具合悪いことです」と、誰彼となく申し上げる。

「紀伊守で親しくお仕えいたしております者が、中川の辺りにある家に、最近水を引き入れて、涼しい木蔭がございます」と申し上げる。

「とても良い考えである。気分が悪いから、牛車のみまで入つて行かれる所を」

とおつしやる。内密の方違えのお邸は、たくさんあるに違いないのであるが、長いご無沙汰の後にいらつしやつたのに、方角が悪いからといって、期待を裏切つて他へ行つたとお思ひになるのは、気の毒だと思われたのである。紀伊守に御用を言い付けなさると、お引き受けは致したものの、引き下がつて、

「伊予守の朝臣の家に、慎み事がございまして、女房たちが来てゐる時なので、狭い家でございしますので、失礼に当たる事がありはしないか」

と、心中に困惑してゐるのをお聞きになつて、

「そうした人が近くにゐるのが、嬉しいのだ。女気のない旅寝は、何となく不気味な心地がするからね。ちよつとその几帳の後ろに」とおつしやるので、

「なるほど、適当なご座所で」と言つて、使ひの者を走らせる。とてもこつそりと、格別に大げさでない所をと、急いでお出になるので、左大臣にも「ご挨拶なさらず、お供にも親しい者ばかり連れておいでになつた。」

「第二段 紀伊守邸への方違へ」

「あまりに急なご座所」と迷惑がるが、誰も聞き入れない。寢殿の東面をきれいに片づけさせて、急拵えのご座所を設けた。遣水の趣向などは、それなりに趣深く作つてある。田舎家風の柴垣を廻らして、前栽など気を配つて植えてある。風が涼しくて、どこからともない微かな虫の声々が聞こえ、蛩がたくさん飛び交つて、趣のある有様である。

人々は、渡殿の下から湧き出ている泉に臨んで座つて、酒を飲む。主人

もご馳走の準備に走り回つてゐる間、源氏の君はゆつたりとお眺めになつて、あの、中の品の例に挙げていたのは、きつとごつう家女性なのだろう、とお思ひ出しになる。

高い望みをもつていたようにお耳になさつていた女性なので、関心を持つて耳を澄ましていらつしやる。この西面に人のゐる様子がする。衣ずれの音がさらさらとして、若い女性の声々が愛らしい。そうは言つても小声で、笑つたりなどする様子は、わざとらしい。格子を上げてあつたが、紀伊守が「不用意な」と小言を言つて下ろしてしまつたので、火を灯してゐる明りが、襖障子の上から漏れてゐるので、そつとお近寄りになつて、見えるだろうかと、とお思ひになるが、隙間もないので、少しの間お聞きになつてゐると、この近い母屋の方に集つてゐるのである。ひそひそ話してゐる内容をお聞きになると、「自分の噂話のようである。」

「とてもたいそう真面目ぶつて。まだお若いのに、高貴な北の方が定まつていらつしやるとは、なんとつまらないでしょう」

「でも、人の知らない所では、うまくもまあ、隠れて通つていらつしやるということですよ」

などと噂してゐるのにつけ、胸の内にあることばかりが気にかかつていらつしやるので、まっさきにどきりとして、「このような噂話の折にも、人が言い漏らすようなことを、聞きつけるような事が起こつたら」などご心配なさる。

別段のこともないので、途中まで聞いてお止めになつた。式部卿宮の姫君に、朝顔の花を差し上げなかつた時の和歌などを、少し文句を違えて語るのが聞こえる。「ゆつたりと和歌を口にするこつとよ、やはり見劣りするこつとだろつ」とお思ひになる。

紀伊守が出て来て、灯籠を掛け添え、灯火を明るく掻き立てたりして、お菓子程度を差し上げた。

帷帳の準備も、いかがなつておるか。そうした方面の趣向もなくて、興醒めなもてなしである。「とおつしやる」と、

「はて、何がお気に召しますやら、わかりませんので」と、恐縮して控えてゐる。端の方のご座所に、うたた寝といつたふうになつて横におなりになると、人々も静かになつた。

主人の子供たちが、かわいらしい様子でいる。その子供で、童殿上している間に見慣れていらっしやるのもいる。伊予介の子もいる。大勢いる中で、とても感じが上品で、十二、三歳くらいになるのもいる。

「どの子が誰の子か」などと、お尋ねになると、

「この子は、故衛門督の末の子で、大変にかわいがっていましたが、まだ幼いうちに親に先立たれまして、姉につながる縁で、こうしてここにいるわけでございます。学問などもできそうで、悪くはありませんが、童殿上なども考えておりますが、すらすらとはできませんようです」と申し上げると、

「気の毒なことだ。この子の姉君が、そなたの継母か」

「さようでございます」と申し上げると、

「年に似合わない継母を、持ったことだなあ。主上におかれてもお耳にお忘れにならず、宮仕えに差し上げると、ちらと奏上したことは、その後どうなったのか」と、いつであったか仰せられた。人の世とは無常なものだ」と、とても大人びておっしゃる。

「思いがけず、こうしていらるのでございます。男女の仲と言うものは、所詮、そのようなものばかりで。今も昔も、どうなるか分からないものでございます。中でも、女の運命は定めのないのが、哀れでございます」などと申し上げて途中で止める。

「伊予介は、大事にしているか。主君と思っているだろうか」

「どう致しまして。内々の主君として世話しておりますよう。好色がましいことだと、わたくしめをはじめとして、納得できないほどでございます」などと申し上げる。

「そうは言っても、そなたたちのような相応しく当世風の人に、譲るであろうか。あの伊予介は、なかなか風流心があって、気取っているからな」などと、お話をさして、

「で、どう」

「皆、下屋に下がらせましたが、まだ下がりがきらないでいるかも知れません」と申し上げる。

酔いが回って、供人は皆は簀子にそれぞれ臥せて、静かになった。

「第三段 空蟬の寝所に忍び込む」

源氏の君は、気を落ち着けてお寝にもなれず、空しい一人寝だと思われるとお目も冴えて、この北の襖障子の向こう側に人のいる様子があるので、

「ここが、話に出た女が隠れている所であろうか、どんなであろうか」と、関心をもって、静かに起き上がった。立ち聞きなされると、先程の子供の声で、

「もしもし。どこにいらっしやいますか」

と、かすれた声で、かわいらしく言つと、

「ここに寝ています。お客様はお寝になりましたか。どんなにお近かろうかと心配していましたが、でも、遠そうだわね」

と言つ。寝ていた声で取り繕わないのが、とてもよく似ていたので、姉

だなお聞きになった。

「廂の間にお寝になりました。噂に聞いていたお姿を拝見いたしました。噂通りに立派でした」と、ひそひそ声で言つ。

「昼間であつたら、覗いて拝見できたのにね」

と眠そうに言つて、顔を引き入れた声がある。惜しいな、気を入れてもつと聞いてくれたら」と残念にお思いになる。

「わたしは、端に寝ましよう。ああ、疲れた」

と言つて、灯心を引き出したりしているのである。女君は、ちょうどこの襖障子口の斜め向こう側に臥しているのである。

「中將の君はどこですか。誰もいないよう、何となく怖い」

と言つらしい、すると、長押の下の方で、女房たちは臥したまま答えて

いるようである。

「下屋に、お湯を使いを下りていますが、すぐに参ります」とのことです

「下屋に、お湯を使いを下りていますが、すぐに参ります」とのことです

「下屋に、お湯を使いを下りていますが、すぐに参ります」とのことです

「下屋に、お湯を使いを下りていますが、すぐに参ります」とのことです

「下屋に、お湯を使いを下りていますが、すぐに参ります」とのことです

「下屋に、お湯を使いを下りていますが、すぐに参ります」とのことです

「下屋に、お湯を使いを下りていますが、すぐに参ります」とのことです

「中将をお呼びでしたので。人知れずお慕いしておりました、その甲斐があった気がしまして」

とおっしゃるのを、すぐには誰とも分からず、魔物にでも襲われたような気がして、

「きゃっ」と脅えたが、顔に衣が触れて、声にもならない。

「突然のことで、一時の戯れ心とお思いになるのも、ごもつともですが、長年、恋い慕っていました気持ちを、聞いていただきたく思っています。このような機会を待ち受けていたのも、決していい加減な気持ちからではないとお思いになって下さい」

と、とても優しくおっしゃって、鬼神も手荒なことはできないような態度なので、ぶしつけに『ここに、変な人が』とも、大声が出せない。気分は辛く、あつてはならない事だと思つと、情けなくなつて、

「お人違いでございませう」と言つのもやつとである。

消え入らんばかりにとり乱した様子は、まことにいたいたしく可憐なので、いい女だと御覧になつて、

「間違えるはずもない真心を、理解しても下さらずはぐらかしなさいませぬ。好色めいた振る舞いは、決して致しません。気持ちを少し申し上げたいのです」

と言つて、とても小柄なので、抱き上げて襖障子からお出になる時、探していた中将らしい女房が来合させた。

「これ、これ」とおっしゃると、不思議に思つて手探りして行くと、大変に薫物の香があたり一面に匂つていて、顔にまで匂いかかつて来るような感じがするので、理解がついた。意外なことで、これはどうしたことかと、おるおるしないではいられないが、何とも申し上げようもない。普通の男ならば、手荒に引き放すこともできようが、それでさえ大勢の人が知つたらどうであろうか。胸がどきどきして、後からついて来たが、平然として、奥のご座所にお入りになつた。

襖障子を引き閉て、明朝、お迎えに参られよ」とおっしゃると、女はこの女房がどう思つかまでが、死ぬほど耐えられないので、汗びつしよりになつて、とても悩ましい様子でいる、気の毒であるが、例によつて、どこから出てくる言葉であるうか、愛情がわかるほどに、優しく優しく、言

葉を尽くしておっしゃるようだが、やはりまことに情けないので、

「真実のこととは思われませぬ。しがたない身の上ですが、お貶みなさつたお気持ちのほどを、どうして浅い気持ちと存ぜずいられますようか。まことに、このような身分の女には、それなりの生き方がございます」

と言つて、このように無体なことをなさつてゐるのを、深く思いやりがなく嫌なことだと思ひ込んでゐる様子も、なるほど気の毒で、氣後れがするほど立派な態度なので、

「おっしゃる身分身の違いを、まだ知りません、初めての事です。かえつて、わたしを普通の人と同じように思つていらつしやるのが残念です。自然とお聞きになつてゐるようなこともありましよう。むやみな好色心は、まったく持ち合わせておりませんものを。前世からの因縁でしょうか、おっしゃるように、このように軽蔑され申すのも、当然な惑乱を、自分でも不思議なほどで」

などと、真面目になつてゐるとおっしゃるが、まことに類ないご立派さで、ますます打ち解け申し上げることが辛く思われるので、無愛想な氣にくわない女だとお見受け申されようとも、そうしたつまらない女として押し通そうと思つて、ただそつけなく身を処してゐた。人柄がおとなしい性質なうえに、無理に氣強く張りつめてゐるので、しなやかな竹のような感じがして、さすがに手折れそうにもない。

本当に辛く嫌なので、無理無体なお気持ちを、何とも言いようがないと思つて、泣いてゐる様子など、まことに哀れである。気の毒ではあるが、逢わなかつたら心残りであろう、とお思いになる。気持ちの晴らしようもなく、情けないと思つてゐるので、

「どうして、こうお嫌いになるのですか。思いがけない逢瀬こそ、前世からの因縁だと思ひなさい。むやみに男女の仲を知らない者のように、泣いていらつしやるのが、とても辛い」と、恨み言をいわれて、

「とてもこのような情けない身の運命が定まらない、昔のままのわが身で、このようなお気持ちを頂戴したのならば、とんでもない身勝手な希望ですが、愛していただける時もあるうつかと存じて慰めることもできません。に。とてもこのような、一時の仮寝のことを思ひますと、どうしようもなく心惑いされてならないのです。たとえ、こうとなりまして、逢つたと

言わないで下さいまし」

と言つて、悲しんでいる様子は、まことに道理である。並々ならず行く末を約束し慰めなされる言葉は、きつと多いことである。

鶏も鳴いた。人々が起き出して、

「ひどく寝過してしまつたなあ」

「お車を引き出せよ」

などと言つていているようだ。紀伊守も起き出して来て、

「女性などの方違えならばともかく。暗いうちからお急ぎあそばさずとも」

などと言つているのも聞こえる。

源氏の君は、再びこのような機会があることもとても難しいし、わざわざとは、どうしてできようか、お手紙などもを通わすことはとても無理なことをお思いになると、ひどく胸が痛む。奥の中將の君も出て来て、とても困つていたので、お放しになつても、再びお引き留めになつては、

「どのようにして、お便りを差し上げたらよかるうか。何とも言いようのない、お気持ちの冷たさといい、慕わしさといい、深く刻みこまれた思いは、いろいろとめつたにないことであつたね」

と言つて、お泣きになる様子は、とても優美である。

鶏もしきりに鳴くので、気もせかされて、

「あなたの冷たい態度に恨み言を十分に言わないうちに夜もしらみかけ、鶏までがあなただしく鳴いてわたしを起こそうとするのでしょつか」

女は、わが身の上を思うと、まことに不似合いで眩しい気持ちをして、素晴らしいお持てなしも、何とも感ぜず、平生はとも生真面目過ぎて嫌な男だと侮つてゐる伊予国の方角が思いやられて、夢に現われやしないかと思つと、何となく恐ろしくて気がひける。

「わが身の辛さを嘆いても嘆き足りないうちに明ける夜は、鶏の鳴く音に併せて、わたしも泣かれてなりません」

ずんずんと明るくなるので、襖障子口までお送りになる。邸の内も外も騒がしいので、引き閉てて、お別れになる時、心細い気がして、仲を隔てる関のように思われた。

御直衣などをお召しになつて、南面の高欄で少しの間眺めていらつしやる。西面の格子を忙しく上げて、女房たちが覗き見しているようである。簀子

の中央に立ててある小障子の上から、わずかにお見えになるお姿を、身に感じ入つてゐる好色な女もいるようである。

月は有明で、光を押さえた明るさだが、輪郭ははつきりと見えて、かえつて趣のある曙の空である。無心なはずの空の様子も、ただ見る人によつて美しくもぞつとするようにも見えるのであつた。人に言われぬお心には、とても胸痛く、文を通わす手立てさえないものをと、後髪引かれる思いでお出になつた。

お邸にお帰りになつても、すぐにもお寝みになれない。再び逢える手立てのないのが、自分以上に、あの女が悩んでゐるであろう心の中は、どんなであろうかと、気の毒にご想像なされる。特に優れた所はないが、見苦しくなく身嗜みもとりつくろつていた中の品であつた。何でもよく知つてゐる人の言つたことは、なるほどであつた。とうなずかれるのであつた。

最近、大殿邸にばかりいらつしやる。やはり、すっかりあれきりなので、思い悩んでゐるであろうことが、気の毒にお心にかかつて、心苦しき思い悩みなさつて、紀伊守をお召しになつた。

「あの、先日の中納言の子は、下さらないか。かわいらしげに見えたが。身近に使う者として。主上にも、わたしが差し上げたい」とおつしやる。とても恐れ多いお言葉でございます。姉に当たる人に仰せ言を伝えてみましょう」

と、申し上げるにつけても、どきりとなさるが、

「その姉君は、そなたの弟をお持ちか」

「いえ、おりません。この二年ほどは、こうして暮らしておりますが、父親の意向と違つたと嘆いて、気も進まないでゐるよう、聞いております」

「気の毒なことよ。まあまあの評判の人だつた。本当に、器量が良いか」

「悪くはございませんでしょう。離れて疎遠に致しておりますので、世間の言い草のとおり、親しくしておりません」と申し上げる。

「第四段 それから数日後」

そうして、五、六日が過ぎて、この子を連れて参つた。きめこまやかに美しいというのではないが、優美な姿をしていて、貴人と見えた。招き寄せ

て、とても親しくお話をなさる。子供心に、とても素晴らしい嬉しく思う。「どこに」とおっしゃると、これこれしかじかです、と申し上げるので、姉君のことも詳しくお尋ねになる。答えられることはお答え申し上げながら、「だめだね。呆れた」と言つて、またもお与えになった。「おまえは知らないのだね。あの伊予の老人よりは、先に関係していたのだよ。けれど、頼りなく弱々しいといつて、不恰な夫をもつて、このように馬鹿になさるらしい。そうであつても、おまえはわたしの子でいてくれよ。あの頼りにしている人は、古い先短いですからね」

このようなことであつたかと、ぼんやりと分かるのも、意外なことではあるが、子供心に深くも考えない。お手紙を持つて来たので、女は、あまりのことに涙が出てしまった。弟がどう思っていることだろうかと気恥ずかしくて、そうは言つても、お手紙で顔を隠すように広げた。とてもたくさん書き連ねてあつて、

「夢が現実となつたあの夜以来、再び逢える夜があるのかと嘆いているうちに、目までが合わさらないで眠れない夜を幾日も送つています。眠れる夜がないので」

などと、見たこともないほどの、素晴らしいご筆跡も、目も涙に曇つて、本意な運命がさらにつきまとう身の上を思い続けて臥せてしまわれた。翌日、小君をお召しになつていたので、参上しますと言つて、お返事を催促する。

「このようなお手紙を見るような人はいません、と申し上げなさい」

とおっしゃると、にこつと微笑んで、

「間違はずなくおっしゃつたのに。どうして、そのように申し上げられましようか」

と言つので、小癪に思い、すっかりおっしゃられ、知らせてしまったのだ、と思つと、辛く思われること、この上ない。

「いいえ、ませた口をきくものではありませんよ。それなら、もう参上してはいけません」と不機嫌になられたが、

「お召しになるのに、どうして」と言つて、参上した。

紀伊守は、好色心をもつてこの継母の様子をもつたいない人と思つて、何かとおもねつていたので、この子をも大切に、連れて歩く。

源氏の君は、お召しになつて、

「昨日一日中待つていたのに。やはり、わたしほどには思つてくれないようだね」

とお恨みになると、顔を赤らめて畏まつている。

「だめだね。呆れた」と言つて、またもお与えになった。

「おまえは知らないのだね。あの伊予の老人よりは、先に関係していたのだよ。けれど、頼りなく弱々しいといつて、不恰な夫をもつて、このように馬鹿になさるらしい。そうであつても、おまえはわたしの子でいてくれよ。あの頼りにしている人は、古い先短いですからね」

とおっしゃると、そうであつたのかも知れない。大変なことだなと思つているのを、かわいしいとお思ひになる。

この子連れて歩きなすつて、内裏にも連れて参上などなさる。ご自分の御匣殿にお命じになつて、装束なども調達させ、本当の親のように面倒見なさる。

お手紙はいつもある。けれど、この子もとても幼く、うつかり落としてもしたら、軽々しい浮名まで背負い込み、風評も相応しくなく思つと、幸せも自分の身に合つてこそと思つて、心を許したお返事も申し上げない。ほのかに拝見したご様子や態度は、本当に、並々の人ではなく素晴らしいかつた」と、お思ひ出し申さずにはいられないが、お気持ちにお応え申しても、今さら何になることだろうか。などと、思い返すのであつた。

源氏の君は、お忘れになる時の間もなく、心苦しくも恋しくもお思ひ出しになる。悩んでいた様子などのいじらしさも、払い除けようもなく思ひ続けていらつしやる。軽々しくひそかに隠れてお立ち寄りなさるのも、人目の多い所で、不都合な振る舞いを見せはしまいかと、相手にも氣の毒である、とお困りになる。

例によつて、内裏に何日もいらつしやるころ、都合のよい方違えの日をお待ちになる。急に退出なさるふりをして、途中からお越しになつた。

紀伊守は驚いて、先日の遣水を光榮に思い、恐縮し喜ぶ。小君には、昼から、「ごうしよつと思つている」とお約束なさつていた。朝に夕に連れ従えていらつしやつたので、今宵も、まっさきにお召しになつていた。

女も、そのようなお手紙があつたので、人目をこまかしなさるお気持ちのほどは、浅いものとは思われないが、そうだからといつて、氣を許して、みつともない様をお見せ申すのも、つまらなく、夢のようにして過ぎてしまつた嘆きを、さらにまた味わおうとするのかと、思い乱れて、やはりこ

うしてお待ち受け申し上げることが気恥ずかしいので、小君が出て行った後で、

「とても近いので、気が引けます。気分が悪いので、こつそりと肩腰を叩かせたりしたいので、少し離れた所で」

と言って、渡殿に、中将の君といった者が部屋を持っていた隠れ処に、移って行った。

そのつもりで、供人たちを早く寝かせて、お便りなさるが、小君は尋ね当てられない。すべての場所を探し歩いて、渡殿に入りこんで、やつとのこと探し当てた。ほんとうにあんまりひどい、と思つて、

「どんなにか、役立たずな者と、お思いになるでしょう」と、泣きそうに言うつと、

「このような、不埒な考えは、持つていいものですか。子供がこのような事を取り次ぐのは、ひどく悪いことと言つのに」ときつく言つて、『気分がすぐれないので、女房たちを側に置いて揉ませております』とお伝え申し上げなさい。変だと皆が思つでしょう」

とつっぱねたが、心中では、ほんとうに、このように身分の定まつてしまつた身の上でなく、亡くなつた親の御面影のある邸にいたままで、たまさかにもお待ち申し上げるならば、喜んでそうしたいところであるが。無理にお気持ちを分らないふうを装つて無視したのも、どんなにか身の程知らぬ者のようにお思ひになるだろう」と、心に決めたものの、胸が痛くて、やはり心が乱れる。どうちみち、今はどうにもならない運命なのだから、非常識な気にくわれない女で、押しとおそう」と思い諦めた。

源氏の君は、どのように手筈を調えるかと、まだ小さいので不安に思いながら横になつて待つていらつしやると、不首尾である旨を申し上げるので、意外にも珍しく強情なために、わが身までがまことに恥ずかしくなつてしまつた」と、とても気の毒な様子である。しばらくは何もおつしやらず、ひどく嘆息なさつて、辛いとお思ひになつていた。

「近づけば消えるという尋木のような、あなたの心も知らないで 園原への道に、空しく迷つたことです 申し上げるすべもありません」

と詠んで贈られた。女も、やはり、まどろむこともできなかつたので、

「しがない境遇に生きるわたしですから 尋木のようにあなたの前から姿を

消すのです」

とお答え申し上げた。

小君が、とてもお気の毒に思つて眠けを忘れてうろつろつと行き来するのを、女房たちが不思議に思つたろう、と心配なさる。

例によつて、供人たちは眠りこけているが、お一方はぼつと白けた感じだと思ひ続けていらつしやるが、他の女と違つた気の強さが、やはり消えるところかはつきり現れている、と悔しく、こつこつ女であつたから心惹かれたのだと、一方ではお思ひになるものの、癪にさわり情けないので、えいどうともなれとお思ひになるが、そうともお諦めきれず、

「隠れている所に、それでも連れて行け」とおつしやるが、

「とてもむさ苦しい所に籠もつていて、女房が大勢いますよつたので、恐れ多くて」

と申し上げる。気の毒にと思つていた。

「それでは、おまえだけは、わたしを裏切るでないぞ」

とおつしやつて、お側に寝かせなかつた。お若く優しいご様子を、嬉しく素晴らしいと思つていたので、あの薄情な女よりも、かえつてかわいく思われなかつたというそつである。

